

タイトル 竹想譜 - 伊勢湾台風から半世紀 -

掲載日 2009年10月14日(水)

掲載紙誌名 京都新聞 洛西版

掲載面 地域 20面

2009年(平成21年)10月14日 水曜日 地域 20

竹想譜

洛西



いざか旧聞であが、大きな被害をもたらした伊勢湾台風から、9月末半世紀の歳月が過ぎたという。当時、私は笠置町の遠縁のうちに転がりこんで、宇治にあった分校に通う京都大学の1回生であった。以来、大学社会を離れていないこともあって、ついでに思い出のことのように思出すので、50年という歳月の長さには驚く。

教室にクーラーがなかったからには、たいいの大学が7月末まで授業をして、9月末までを夏休みにするようになったが、そんな教室環境ではなかった。当時は、9月に前期の最後の授業や試験をしていたので、台風到来の当日は、私にとって京都大学で最初の定期試験日で、科目は英語であった。しかし、笠置は、かねて水害が多かった木津川が氾濫し、河岸にあったほとんどの家が流された。おそろしく増水した木津川には、フトンやテレビが流れてきた。名物であった吊り橋が老朽化

ち不運となった。心配した親戚が、原付バイクで奈良線に乗り換える木津まで運んでくれたが、もういん金身びしよ濡れで、やっこの思いで宇治分校の教室で試験を受けた。

教室づくまでが大変なことであったが、試験そのものにもいまだに忘れられないことが2つあった。ひとつは、遠距離通学の私が、こんなに苦勞をしてたどりついた教室に、キャンパスの近く下宿していた、何の被害もなかったはずの親友の姿がみえなかったことである。もうひとつは、その代わり、なぜか、いんはずのない顔がひとつあった。あとでわかったのだが、先の友人は、目覚ましを3つかけていたのに、「寝過ぎた」という。よほどのんびりした時代とはいえ、奴のあまりの暢気さにあきれた。

試験日にだけ突然現れたもう1人は想像を絶するものがあつた。5か所ほど、ミミズ臭つけて版元に連絡し、万幸筆だかボールペンだかを、礼にもつたともきいた。だから、もちろん、こちらは、試験にはまるご合格していた。

3人はそろって、西洋史を専攻し、それもイギリス史や卒論を書いた。明復坊の腸気者は、NHKの敏腕プロデューサーになり、いまは、自主製作で平和や環境を扱う映像づくりに精を出している。酔っぱらいの英語好きは、大手出版社の編集部長をひいてからは、関東住まいなのに、京都の大学でマスコミ論を講じるのを趣味のようにしている。2人とも、終生の友人である。

(かわきた・みのるさん 京都産業大教授・大阪大名誉教授・長岡京市在住)

新しいコクリートの橋が渡りそめ待つばかりとなっていたが、こんな状況のなかで無惨なことになるので、みんな勝手に新橋を利用してしままい、誰が最初に渡ったのかわからないようなことになった。関西本線は、笠置と加茂のあいだが難所でもうかん、たちま

伊勢湾台風から半世紀

萩 (長岡京市)



タイトル 竹想譜 - インフルエンザ・地震・歴史学 -

掲載日 2009年06月10日(水)

掲載紙誌名 京都新聞 洛西版

掲載面 地域 18面

2009年(平成21年)6月10日 水曜日 地域 18

洛西

竹想譜

学研都市の東の端に国際高等研究所がある。また数年、フエロを勤めたことがあるが、4月からは副所長の肩になった。所長は、前年大震災で地震学者の尾池和夫さんである。京大の同級生のはずだが、あの特徽的な風貌には全く見覚えがないので、学生時代には、あまり接触の機会がなかったのかも知れない。

先日、所長の就任を記念する公開講演があり、紹介を仰せられた。当日は、なほ、新型インフルエンザが心配されている最中で、隣の同志社大でも休校しているような状況であったが、地震という、きわめて身近な話題であって、会場は満杯となった。それにしても、入り口で送られた白いマスクをつけた人々の表情を相手にするのは、はじめての不思議な経験であった。講演者は、ものごと奇妙を感じたことだろう。

そもそも、長岡京から京都駅に出るまでの車内は、ほとんどインフルエンザ、地震、歴史学

近頃は話であって、会場は満杯となった。それにしても、入り口で送られた白いマスクをつけた人々の表情を相手にするのは、はじめての不思議な経験であった。講演者は、ものごと奇妙を感じたことだろう。

そもそも、長岡京から京都駅に出るまでの車内は、ほとんどインフルエンザ、地震、歴史学

は、何事もなかったように、コンビニや商店がひらいていたが、宝塚線の少し奥のほうに住んでいた同僚たちは、ライフ・ラインの壊滅に極まされ、「西のほうは、地震だ」と、つぶやくように話したのを鮮明に記憶している。

そんなこともあって、尾池所長の紹介には、かつて兵庫県がやっていた「2030年委員会」の話を持ち出した。様々な分野の研究者を集めて、2030年の世界がどうなっているか、そのとき兵庫県はどうなっているかの理想的か、つまり、「歴史予測」という、チャーム的な仮説を与えられた委員会である。会議は議論風発で、私

も世界システム論の立場から、21世紀の世界についていささかの発言もした。しかし会議の結果は、大失敗であった。かの大「地震」を誰も予想できなかったからである。

のあいだでも、「歴史家言はず」が飲則とされ、学生時代には、うろくく指されたものである。未来はどう動くかは誰にも分からないので、予測は必ずはずれる、という教訓である。

しかし、私は、ほんの少し意見が違つ、過去の事物にけを語り、明日どうなるのかという問題に光をまわつた。受けかたは、ない。歴史学には、魅力を感じない。マルクスの未来予想も、彼の対極にあつた人たちの予想も、すべてはずれたが、その予測のゆえにこそ、それらの歴史観は輝いていた。地震の予測については、尾池所長の感覚も、ちょっと似たものさしに感じている。尾池所長の感覚も、ちょっと似たものさしに感じている。尾池所長の感覚も、

（かむきた・みのるさん 京都産業大教授・大阪大名誉教授、長岡京市在住）

ムラサキソウチヤ
(天山崎町)



川北 稔

